

## 山田孝雄の

### 『日本文法学概論』を読む

——山田の論理をたどりつつ——（未完）

北原美紗子

近代日本語文法学界には、四人の体系化した文法学説を打ちたてた、優れた文法学者が存在する。橋本進吉、時枝誠記<sup>もとぎ</sup>、山田孝雄<sup>よしを</sup>、松下大三郎、この四人である。

助詞の意味論から文法学を専門として歩んできた私にとって、山田孝雄は、仰ぎ見る高い峰の学者であつた。四年前、私は、時枝誠記の『国語学原論』と、ソシュールの『言語学原論』とを読みくらべて、清泉女子大学の紀要に論文を書いた。書いていて、あれほど心躍る想いのしたことはなかった。実は、時枝誠記は、私の憧れの人だつた。ただ、あの論文を書いて、少し私の時枝熱は冷めた。それと同時に、ソシュールと時枝の論の立て方の違いに、妙に心が騒いだ。文法学の最高峰に位置する人の論の立て方を知りたい。そこで、時枝に続いて、山田孝雄の文法理論に挑戦してみることにした。

しかし、想像以上に難しい。厚さ、約八センチの山田孝雄の『日本文法学概論』を読了するのに、三年かかった。時々、本当に止めよう

と思った。止める理由の根拠にするのには、

本当に、山田孝雄の文法論は言われるほど、すごいのだろうか。違うのじゃないか。

これしかなかった。それでも、読み続けたのは、ソシュールの『言語学原論』から感じ取ったヨーロッパの言語学者の圧倒的な論理の組み立てと、日本の国語学者の時枝誠記の、若い力のすべてをかけて挑んだ大胆な着想のすごさから受けた感動の火を、消してしまいたくなかったから。

山田孝雄は、何をこの分厚な著書の中で語り続けているのだろうか。

山田孝雄は、既にこの世になく、生涯をかけて日本語の文法を極め盡した著書の中で、最高と言われる本が、私の目の前に存在し続ける。やはり読み続けるしかなかった。

今、この論を書き始めるにあたって、一一四八頁の最後まで

なほ又この省略が言語の變遷を促す著しき楔子となるものなれど、そは文法學の直接の問題にあらざるが故にこゝに筆を擱く。

とにかく、私は読了した。止めよう止めようと思うのに、一行も飛ばさず読了をうながし続けたのは、他ならぬ山田孝雄だった。その事を書き記して、はじめから丹念に読み進めていく形で、本論に入りたい。

序文に、山田は次のように記した。

本書は余が東北帝國大學に職を奉じたりし際に講述せしものの草案に多少の修訂を加へたるものなり。この著の目的は余が現に抱懐する日本文法の學理の概括をなすにあり。されば舊著日本文法論等に既に論ぜしものにして再び詳論するを要せずと感じたるものはその要をとりたてるのみにて詳論せざるものもあり。然れども事の順序として説かざるを得ざるものは重複せる所も存す。而して舊著に於いて未だ論及せざりし點及び説きて詳かならざりし點、並びに多少なりとも改むべき點等はすべてこの論に於いて稍委しく論じたり。それらの點につきて一二をいはゞ形容詞に就きて複語尾につきて、助詞「は」につきて、位格ことに主格述格につきて、及び汎く句論に於いては頗る改め加へたる所あり、而し

て、語の排列の原理及び最後の省略の條につきては特に注意を請ふべき點少からずとす。

昭和十一年三月二十九日

山田 孝雄

この『日本文法學概論』が出版された二年後、昭和十三年の国語學界で、弱冠三十一歳の時枝誠記は、言語過程説を公けにした。この頃は、日本語に対する、熱く真摯な學問成果が実り、生まれる機運にあつたのだろうか。心をゆさぶる日本語学の論文が、今、出逢えることなどあるのだろうか。ない。おびただし小々な論文は、たくさん発表されたとしても、小さなテーマで、こじんまりとまとめただけで、山田孝雄や時枝誠記のように、母国語を觀察し、考え、分析し、そして壮大な体系化まで造型していこうというような、スケールの大きな學問は生まれてはいない。

そしてまた、私には不思議な思いが起ってくる。それは、時枝理論は、公表されてから言語学者や国語学者から、激しい批判を集中して浴びた。そして、それらの批判に対して、時枝の反論は、実は、私から見ると物足りなかった。私が援護してあげたいと思う反論の論文もあつた。

実は、その点こそが時枝理論の優れた点であり、そして弱点なのではないか。時枝は、反論しながら、自らの理論を危うくしている時さえあった。時枝理論は、ソシュールの言語の学に対する激しい反発から生まれた、今も火を噴く活火山である。

長い、歴史の中で血となり肉となったヨーロッパの論理の伝統から生まれ完成したソシュールの言語の学こそは、言語とは何かに対する、なぜ言葉は通じるのかに対する、明快な真理である。時枝は、小林英夫から知ったソシュールの論に對し、日本人らしい鋭い情感で、激しくぶつかっていった。血の中に流れ持つ論理の構築に對して、ヨーロッパ人のソシュールに對して、若き時枝は捨て身でぶつかった。ソシュールの弟子達も継承することの出来なかったソシュールの言語の学の、ソシュールの捨て去り、切り棄てた、言語は究極のところ、個のもの、個人の発するものだという、わずかな論理の隙間に切り込んでいって、言語のもう一面の真理を見つけたのだった。

ただ、もう一度、くり返すならば、日本の文法学を体系化したと言われる四大文法学者、橋本進吉、時枝誠記、山田孝雄、松下大三郎のそれぞれの理論に對して、時枝を除いて、後の三人の文法理論が激しい批判や反論を浴びたことなどあったのだろうか。日本語学の本が出版されたとしても、文法学の講座が刊行されたとしても、四人の文法理論の紹介がほとんどだったと、私には思える。なぜなのだろう。

う。生涯をかけた一人の学者の学問が、若かるうが、年であろうか、激しい反発や批判に出逢って、議論が生まれて、なおかつ譲れないものは譲れないという、せめぎ合いがないならば、人文科学の学問は、発展もなければ、進展もなく、ただ活字になるだけで魅力を失っていつているのではないか。

ただ学問の道を選び生きて、ただ、ひとときの作品が活字になるだけならば、空しさのみ抱えて、わびし過ぎないか。

こう書き進めながら、私は、山田孝雄の文法理論に對して、もちろんこの著書に限るのであるが、時枝誠記に抱き続けたような情熱を持って、出逢い、読み、書き進めていく氣持を固めた。山田は語る。

言語は人が思想を発表し、他に伝ふる方法として、その思想を声音にてあらわしたるものなり。(P1)

ここから、旧字体を今の字体に改めていく。その方が読み易いと思うので。

言語は元来思想の発表交換の要具にして、その思想という方面よりいえば、その言語の主たる個人の思想を発表したりといふには

相違なきことなれど、その思想を寓せられてある言語は個人の勝手  
の産物にあらず。(P3)

即ち言語は個人的のものにあらずして一種の社会的現象なりとい  
ふことを先づ認めざるべからず。(P3)

先づ言語の内容をなす所の思想といふものはその進展の過程が時  
間的のものなるを見る時に、その思想を發表したる言語が、時間  
的のものなることを考ふべし。(P3)

山田の言語観が冒頭に、くり返される。言語は、個人の思想を發表す  
る要具である。言語は個人の産物ではなく、社会的現象である。言語  
は時間的なものである。

時枝とソシュールの言語観を読みくらべた時の、相対立した論から  
感じた言語とは何かという、熱い想いはあまり感じられない。はるか  
に冷静に、言語を観察し記述していく。さらに文法学の本質はと問ひ、  
述べる。

文法学の本質は記述的の学問にして国語の間に存する理法を探求

し、之を説明するに止まるものにして、正不正の規範を論じ美醜  
の標準を論ずるを目的とするものにあらざるなり。(P16)

抑もかゝる社会の事相に対する学問にはいつも縦断的に見る歴史  
の研究と横断的に見る組織の研究との二方面の存する筈なり。  
今文法学はこの横断的に見る組織の研究たるなり。即ちこれはあ  
る国語につきて静的に見て同時に關係的に存する言語材料とそれ  
ら材料が相關し相依りて組織する体系の研究なりとす。(P17)

文法学の本質は、記述的の学問である。国語の間に存在する理法を探  
求し、之を説明するに止まるものである。

山田の己が文法学に対する基本とするこの理念は、この著書の中で  
も何度か明言されていて、確固とした信念である。

之を説明するに止まるものなり。

日本語の中に存在する言葉の法則を探索して、あらわれた法則を刻明  
に説明すること。これから先に進んではいけないと、強く断言した。

この山田の文法学に対する理念を忠実に、記し止めたもの。それが  
『日本文法学概論』だと読了したばかりの私は、深く納得する。そし

てまた、学問には縦断面と横断面とを見る二方面があり、文法学は横断面の研究であり、それぞれの言語が相関し、相依りて組織する体系の研究なりと記す。自らの学問が完成し体系化出来たことを確信した上での言葉と見れば、この本の執筆当時、山田は自らの学説の完成を自負していたと言つてよいのではないか。

三年前、この分厚な本を読み始めた当初、難解な文体に何度も止めたくなつた私は、今こういう読みが出来るとは、思わなかつた。石の上にも三年の言葉通り、体系化を果していたとしたならば、挑んでも挑んでもはじかれたのも当然のことかも知れない。山田は、日本語に存在する法の細部まで、すべて明らかにし尽したのだろうか。一切の批判を寄せつけないほどに完璧なのか。どこかに弱点はないのか。見附きたい。それを可能にするのは、忠実にそして真剣に、山田の論を読み究めていくしかないと思う。それにしても、私を困惑させ続けた、山田の二重否定多用の表現は、山田の自らの学説に対する確たる自負のあらわれなのか。文法とは何かについて、

国語を思想に応じて運用する一般的の法則なりというをうべし。

(P17)

思想の表現に国語を運用する法則が文法だと言う。

されど思想の法は直ちに文法とはなるべからず。(P18)

ここで言う、山田の思想の法とは何を指すのか。そして、山田の思想とは、さらに具体的に何を言っているのか。思想については、文は思想の発表であり、語は思想の発表に用いる材料という見解を述べる。

今これを論ぜむに、たとえばこゝに「犬」という語「川」という語ありとせよ。これは通常何人も一の語なりというに躊躇せざる筈のものなり。然るに、こゝに思ひもよらぬ所に突然犬が目前に突進し来たりとせば、大抵の人は「犬々」と叫ぶなるべし。「犬」という語は一の語たるに相違なれどこの場合に於いてはたゞの語としてあげたるにあらずして、ある思想を発表する為に叫びたるものたるは明かなり。(P20)

「犬」は思想の発表の材料であり、飛び出してきた犬を見て、大抵の人は「犬々」と叫ぶが、その

犬犬

は、大抵の人の思想の発表その事であつて、文である。思想の発表の材料としての「犬」は語であり、「犬犬」の犬は文であると言う。

「犬犬」と叫んだ人は、犬一文、犬一文、即ち、文を二回叫んだという考えと取っていいのであろうか。

犬、一語が觀念をあらわす場合と、ある思想をあらわす場合とに、山田は分けた。語と思想をあらわす文との違いは、さらにこの後も論じられていくが、この膨大な論を誠実に、そして徹底して読み解き、山田理論を理解し、山田文法学の全貌を明らかにしていこうと、志を立て、ようやく手応えが見つかり取りかかり始めた、私としては、細かに自らに諒解を取りつつ、確かめつつ、ゆつくりと書き進めていくつもりである。

今、五月の末、まだ四ヶ月ある。充分、間に合うだろうと思う。

山田は、文を思想の発表と言い、語をその発表に用いられる材料と言う。同一物を分解的見地より見るか、総合的見地より見るかの差異であると言う。觀念をあらわす語は、思想をあらわす目的の為に用いられてある時、文に変貌すると言うのであろう。

文法学にありてはその分析的研究を語の論といい、その総合的研究を句の論という。(P24)

人間の思想と語との交渉を研究するものにして大局より見て総合的研究なりとす。(P26)

而してこの最後の総合的研究に至りて文法学の最終の地位に到達したるものとす。(P26)

句の論の完結が、文法学の到り着く最終の地位なのだという。山田理論の行き着くところ、句論に集結するのであろう。そこにたどりつくまで、全頁の77%を占める語の徹底した分析に注目したい。

まず単語の性質論から入った。そして分類から述べる。名詞、代名詞、数詞、形容詞、動詞、助動詞、副詞、接続詞、感動詞、助詞この分類が、現今の多くの分類と言う。助詞を除く外はすべて西洋文典の名目に似ていると言い、それでは西洋の言語と日本語とが同一かと問いい、近世からの国学者の分類を述べた。さらには西洋文典は、ギリシャ時代にさかのぼることに言及した。そして西洋語の名詞と日本語の名詞との差異に触れた。

彼れは所謂事物の觀念をあらわすと同時にその事物觀念が他の語

に對する關係をも示すものなるに、吾人の國語にては關係をあらわすには特別の語が外にありて、名詞は單に事物の觀念を裸體的にあらわすのみに止まることこれなり。

特別の語は、テニヲハなのだとする。彼の言語には前置詞が似ているが、前置詞は往々詞の後に置かれるものもあると言う。しかし、テニヲハは必ず詞の後に置くと言う。故に、前置詞という名目は國語に適用すべきではないと言う。さらに考えるべきものとして、接続詞をあげた。西洋の接続詞というものは、文と文との結合をなすものと語と語との結合をなすものと二種ありと言う。そして、かれの接続詞は思想觀念上の連絡を助くるのみならず、その形態上一連続體たることをも同時にあらわすものなることに注意せざるべからず。注意すべきだと言う。それから、國語の接続詞とされるものの実例をあげ論じた。

一、山を越え、又水を渉る。

二、書を読み、且字を記す。

三、春になりぬ。されどなほ冬の心ちす。

四、諸車通行止。但し空車は此限にあらす。の如き例の「又」「且」「されど」「但し」の類をさせり。これらは一見上下二文を接続したる結合要素の如く見ゆれど、よく見れば、その然らざるを知る

べし。

山田は、この四例の又、且、されど、但しの普通に接続詞とされるものを外した。理由は以下の事実によつてである。

三、四は、上文は上文にて意義完結し陳述の方法も語の形態上も、完結している。されど、ただしは、二文の意義上の關係を示すけれど、形態上二文を結合して一体とすべき勢力は持っていない。一、二の二例は、接続詞を外してみれば

山を越え、水を渉る。

書を読み、字を記す。

変らないではないか。これらの文の連接の能力は「越え」「読み」という語形に存し、それによりて二文は一体となっている。又、且の如きは、西洋文典の、副詞の一部分である接続副詞に酷似する。それならば、西洋の接続詞に匹敵する、形態上二文を接続する能力を有する語は、まったく無いのか。在ると断言する。我國のテニヲハなのだと  
言う。

桜の花開かば、我等は運動会を催すべし。恒星は自己の光を有すれども、遊星は他の光を受けて光る。

普通に接続助詞と言われる助詞の「ば」「ど」「ども」の如き語が、上下二文を結合して意義上より形態上よりしても、一連続たらしめる能力を有すると言った。

かく見れば、彼れの接続詞はわが文法家の所謂接続詞に相当するものにあらずしてわが「テニヲハ」の一部にこれに該当するものありと知るべきなり。

前置詞、接続詞を西洋の文法と比較して、違いを述べ、日本語の「テニヲハ」即ち、助詞の機能に注目した。感動詞については、副詞の如く他の語句に冠して用いられるものと言う。代名詞、数詞、動詞については、大体において不都合なしと認めた。最後に論ずべきは、形容詞だと言う。

従来形容詞という語を以て英語の *Adjective* の訳語にあて同時に又我が国語の所謂形状言にあてたるを以て甚しき迷惑を初学者に与えたり。

なぜかと言えば、我が国語の形容詞は、属性観念と同時に、陳述の能力即ち統覚作用をもその一の語にあらわす。英語では *to be*、独逸語

では *sein* を鎖として用い、形容詞とその鎖の二語でもって、その属性を主格に対し、結合して陳述し得るとして、ここに日本語の形容詞との差有りとした。西洋文典の形容詞の本性的用法は単に名詞を修飾限定するにあるのみ。それにくらべて、わが形容詞は動詞とまったく変らない性質を持ち、その属性観念の差に止まると言う。

西洋文典の動詞の一変体としての分詞という名目に対しては

思ふに分詞という名目は動詞は陳述をのみあらわし、形容詞は名詞の限定をのみなせるものとせる人為的の説明を下せる後に生ずる矛盾を弥縫する名目たるに止まる。

ここで山田は、日本語の文法を西洋語の文法の語で説明する危険を指摘し、続いて近世以来の日本の文法学の分類の是非を論じ始めた。

ここに至りてはじめて吾人は従来のすべての分類法の拘束を離れて自由の見地よりして国語の本性に適する分類を企つべき自由を完全に得たりと言うべきなるが

と言った。

即ち、西洋文典の文法用語での分類の不都合さを述べ、近世以来の



文法学説の分類を記述して、我自由なりと宣言した山田は、まったく独自の分類を決定し、これ以上ないものと確信したと考えていいと言える。

この厚さ八センチに及ぶ大著は、山田の文法学の最高峰を示すものと考えていい。この書の出版後、二年も経たずに弱冠三十一歳の時枝誠記が、言語過程説で学界に衝撃を与えた。この時代、日本の文法学界には、東京大学の国語学の主任教授の、橋本進吉がひしめく秀才たちを率いて存在した。

日本の近代の文法学は、つい最近まで、東の東大、西の京大の学者群が優れた学説を発表して学界を引っ張ってきた。

このごろ、明らかに文法学は衰えた。斬新な学説も、閥を發展させ、しのぎを削り、そこから生まれた気鋭の学者の出現も、消えた。東大と京大は、対立しつつ文法学界に俊鋭を送り続けてきたはずなのに、それも無い。文法学がふたたび生氣を取り戻す日が来るのだろうか。

山田は孤高の学者だった。ソシユールのように、橋本のように、学問を受け継ぎ發展させていく秀才の弟子たちを持つてはいなかった。二人ほどには。それだけに、日本語の文法に対する、烈しく、熱い情熱は迫力がある。分け与えられることのない自らの文法学の理論の完成を記す、この本は、なかなか先に進めない。

山田は単語を大別する。観念語と関係語とに分けた。観念語には、名詞、代名詞、数詞、形容詞、動詞、副詞、接続詞、感動詞。何らかの観念をあらわし、一語で一思想を發表し得る。一定の關係に立つて用いられる。その關係をあらわすものが助詞であり、極めて抽象のものである。

山田の理論では、助詞が際立って他の単語と切り離されるのが特質と言える。

論理上二者は判然と區別せらるべきものなりとす。

観念語は、自用語と副用語とに分けた。自用語をさらに二分した。資料たる概念を代表する語、観念語と言ひ、体言が属す。陳述の力のある、陳述語と言ひ、形容詞、動詞が属す。助詞以外の観念語を二大別に分けた規準は、陳述の力があるのか、ないのかに定めた。

少しずつ、山田の文法の根幹が見えてきた。語と語の關係をあらわす助詞を他から獨立させ、副用語の副詞以外を陳述力があるかないかで二分した。さらにこの分類の規準を重要視すると同時に、語の位置に注目した。そして、体言とは何かと問ひ、答える。ここに山田の論理の重要な記述が出てくる。

体言は概念をあらわす語なり。これらは吾人の格助詞に接して種々の関係を他の語にあらわすことを得べし。而してそは如何なるものが之になるかというに、実に吾人が胸中に於いて一の概念として思惟するものは悉く皆体言たることを得るなり。その吾人の胸中に、ある一の思想の活動するや混然たる状態を呈するものなるが、一度思考を之に加えば、こゝに二の異なるものを生ず。即ち先づ実在と思惟するものを認め、又別にこれが属性たるものを認む。この二は實際上決して分離せるものにはあらねど吾人の思考の方便として、これを分離せしめたるものなり。従つて言語の上に於て二様の区別を生ず。こゝに実在といえるは必ずしも哲学上にいう厳密なる意義の実在にあらず。事実にあれ、空想にあれ、抽象的概念にあれ、具象的概念であれ、人の思想に於いて実在なりと認めたるものゝ謂なり。正邪善悪美醜真偽の判別は語学の関する所にあらず。吾人の体言は実にかゝる意義にての実在を代表する単語なり。この故に吾人が一の概念と認めたるものは何にてもあれ、言語として発表する時は直ちに体言としての取扱をなす。この故に用言にもせよ、助詞にもせよ、副詞にもせよ、はた外国語にもせよ、これを一の概念として取扱うときは直ちに体言の資格を有するなり。吾人の体言と称するものは実にかくの如

し。

「日本文法学概論」は、全一一四八頁の大著である。全編に二重否定が多く、読了するのに困難な大著である。しかし、山田が自信を持つて自らの論理を語る時、二重否定表現は姿を消す。この部分がそうだった。山田の言うことが分るような気もする。それでは論文は書けない。ここに、この山田の論理に、私の何が反発するのか。了解出来ないのか。なお、受け入れそうにもなるのは、何に對してなのか。列挙してみたい。

一、体言は概念をあらわす語なり。

一、吾人が胸中に於いて一の概念として思惟するものは悉く皆体言たることを得るなり。

一、それ吾人の胸中に、ある一の思想の活動するや混然たる状態を呈するものなるが、一度思考を之に加へば、こゝに二の異なるものを生ず。

一、この故に用言にもせよ、助詞にもせよ、副詞にもせよ、はた外国語にもせよ、これを一の概念として取扱うときは直ちに体言の資格を有するなり。

私には今は、納得出来ない。思想と思考はどう違うのか。それから、すべての個々の言語を、山田自身が一の概念として思惟し、取扱うときは直ちに体言に変貌するということ。

言語は普遍的なものである。民族による形態の違いはあっても、言語の本質は変らない。山田の到達した文法の論理が、普遍的に、ごく自然に、言語とは何かの問いに、納得出来る答えになり得るのか。吾人の論理が万人の論理になり得るのか。ある面、予測を立てながら共感する面がないわけではないが、まだまだ、山田の論理がすべて明らかになっていくわけではないので、今の疑問を抱きつつ先を読む。吾人の体言についてこうも言う。

吾人の思想の対象とする時にはこれを一の概念として取扱うが故に、その場合は皆体言の資格を有することとなるべし。たとえば

花咲くの「咲く」は動詞なり。

という時「咲く」は体言の資格を受く。

又、

梅の花という場合の「の」は助詞なり。という場合の「の」は体言の資格を受く。

「咲く」と「の」は、吾人の思想の対象とするので体言と断じた。本来、体言でないものを体言とする時、体言と体言でないものの区別はどうするのかと問い、答える。体言の文法上の性質は、その職能とその形態と他の種類の語との関係とによって区別すると言う。文法上の職能は、思想の主体となり、花は咲きたり の「花」、思想の客体は、これは花なり の「花」、他の語に対して概念を補充するものは、鶯は花に鳴くの「花」、他の語に対して修飾限定するもの 花の絵 の「花」 などであると言う。ただし体言の本質は、説明の主体となるべき点に存すると言う。形態上の特徴は文法上の語形の変化が無いことにある。格助詞をつけて他の語に対して種々の関係を示す。次に体言を二種に分け、実質体言と形式体言とに分けた。また名詞については、ある実在と思惟するものをあらわすとする。ただし山田は、名詞を固有名詞、普通名詞、抽象名詞その他と区別することは必要なしと断言する。西洋文献では、たとえば英語では冠詞をつけるかつかないかで、これらの区別は必要であるが、日本語では必要ないと言う。意義の上に留まることにして日本語の文法上区別はいらないと言う。

かく種々の名目を立てゝ区別をなすことは語の意義の研究又は語の成立の研究に多少の利益なしとはいへばからざれども、文法上には何の必要もなきものなれば、文法学上これらの区別を立つることは全く徒勞に属すべきは明かなり。

言語は音声と意味との両方が密接して言語である。その言語を分けるときに、意義を排除してはいけないのではないか。山田は、文法学をどう規制し、文法上必要なものは何と考えたのであろうか。ソシュールの言語観の流れに立つ橋本進吉の文法学は、形式を重んじ音声を重視し、一まとまりの音声の切れめを文節と名づけ、橋本理論の中心に文節の考えを導入したのだった。音声の切れめは当然、意味のひとつまとまりをも想定させる。私はまだ、橋本の文法学を深く考えたことはないが、ソシュールの言語観に立っているのであるから、音声と意味とから構成されているラング、言語が橋本の文法理論の中心に存在していることは、当然である。山田のこの著書が出版されて一年と少しで、時枝誠記が言語過程説を世に出した。時枝は、ソシュールの「言語学原論」を翻訳し日本に紹介した、小林英夫から直きくソシュールの言語観を知り、それへの激しい反発から、言語過程説を生み出した。時枝の文法学が発せし、目指したもの、それは言語の意味論への執着だった。山田の文法学が根底に、据えたものは何だったのか。名

詞の意味上の分け方を排除したのは、英語との比較だったのか。冷静に、山田の論理を追い求め、知りたい。

次に敬語を取りあげた。敬称とは第一称格に立てる者が自己をさし、又は自己に附属するものをさして他に対して謙遜の意をあらわす敬語だと言う。拙者、小生、迂生、手前、以上は従来代名詞と称せられるが、これを名詞と言って差支えないと言い、それ以外にも例をあげて、さらに記す。

これらにつきては名詞の意義のみならば、かくの如き区別をなす必要殆どなきが如くなれども、これが用法上動詞に関連する点あることを考うときはこの区別は文法上なお重要なことをさとするべし。

名詞を考えると、固有名詞、普通名詞（一般名詞とも）、形式名詞、代名詞、数詞を一まとめにくくって、一グループずつの特質、共通した特質を抽出して、同時にそれらのグループの違いを明らかにしていく。どのグループにも共通した特質が存在する。それは、語形が変化しないこと。故に、体言と断ずる。私は、そう考え、このことについて疑点も持たなかった。

しかし、山田は違った。前述した通り、吾人が一の概念と認めたるものは何にてもあれ、言語として発表する時は直ちに体言としての取扱をなす。動詞であれ、助詞であれ、体言の資格を得ると断言し、さらに、私にとつてはごく当り前の名詞の細分化についても、意義即ち、意味を論理の中に導入するのは、文法上には何の必要もないとの理由で、排除した。

しかし、この敬称の論でひとつの矛盾を抱えこんでいないか。なぜなら、敬称を論ずる際に、拙者とか豚児とか薄謝とかを列挙し、分類し、次のように記した。

これらにつきては名詞の意義のみならばかくの如き区別をなす必要殆どなきが如くなれども、これが用法上動詞に関連する点あることを考へるときはこの区別は文法上なお重要なことをささるべし。

用法上動詞に関連する点とは何かについては今のところ論じてはいない。表現は、連関性があつて、悲しみの場面では悲しみにつながる表現があらわれるように、ばらばらの表現になることはあり得ない。厳密に言えば、たくさんの助詞の下に来る動詞には、それぞれある種の片寄りが見られる。そこから考えても、上の名詞と動詞との関連は、

安易に断じては危険である。それに、ここに列挙した名詞は、明らかに意義を重視した論の根拠となり得るものばかりである。この矛盾はどう解決していくのか、注目したい。

代名詞は反射指示と称格指示とに分けた。反射指示は「おのれ」一例だけ。その他の代名詞「われ」「汝」「これ」「それ」「かれ」など普通に代名詞と言われるものすべてを、称格指示としてまとめた。なぜ「おのれ」だけを反射指示にしたのかと言えば、

紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれなきてや秋しをるらむ（後撰集）

この「おのれ」は主格に立てるものだから体言たることを疑うべからずと言う。反射指示というのは、称格の如何に関わらず専ら実体その者に指すものを言う。この「おのれ」という語は称格に関係しないものなので、第一称に対しても、第二称に対しても、第三称に対しても、それが指示として立ちうべく、したがってその指示する実体は、必ずその所に明かに存在すべきはずのものである。これを反射というのは吾人と其者との思想上の関係は実体より出で又かえりて実体をさすことあたかも物影の反射するが如き性質を有するを以てであると言う。

私にはやはり納得がいかない。それは、なぜ「おのれ」だけが別なのか。「われ」でも「汝」でも、主格に立ち得るし、そして代名詞には実体が、それぞれ隠されているだけで、たとえば「誰れ」という代名詞も固定の実体を探し当てんが為の代名詞であって、「おのれ」だけを選び取ったのは、やはり、山田の提唱する吾人の思想で概念と認めたものは、即ち体言なりと同じ、論理からなのではないか。先ほど述べたと同じように、「おのれ」の一語の持つ強力な意味の力に、山田自身が捕えられただけの結果なのではないか。意義を排除しながら、意義に捕えられていく。言葉は一語ずつが、怖るべき固有の意味を持っている。一語の意味だけに吾人の思想が共鳴したら、それは山田の体系化していく文法論理への、危険な落とし穴になっていくのではないか。私の胸の中に広がる危惧を意識しつつ、さらに先に進む。

数詞に入る。数詞をなぜ普通の名詞から外したのかについて述べている。数詞の性質は、客観的形式体言にして、そのあらわす所は客観そのものの存在の形式にあり。而してその存在の形式を数えるということが数詞の根本なりと言う。数は変らず数として存在している。それを個人の主観で変更は出来ない。そして数詞は数える。計る。そうするのは思想上の作用が数詞の根柢をなすものだからと言う。数詞には確実なゆるぎない存在がある。数える、計るという思想上の働きか

けが必要という。代名詞が「おのれ」を除けばすべて実体のないものへの指すということが、中心にあることへの、相対する点であると言う。また、個々の数詞について述べた後、最後にこう言う。数詞が一定の事物の数に関するものであるのを示すには、「一人」「二羽」「三匹」「四本」「五冊」等の如く接辞を添えることがある。又百円、十石、五斤、六尺等の如く一定の量の単位を示す名詞をつけることがある。このような数詞を具象的の数詞ということあり。ここまでで、一四三頁が過ぎた。全体の一割を越えたぐらいである。

数年前、私は、時枝誠記とソシュールの言語観を比較しつつ、一本の論文を書いた。ソシュールも時枝も、自らの全てをかけてぶつかっていたのは、言語とは何かという言語の本質への挑戦だった。私にとって、あの夏の挑戦は、胸躍る日々だった。二人の論の圧巻は、両著の始めにあった。時枝もソシュールも、続く各論は、私にとつてはじめの圧倒的な力のすごさに較べたら、読破する力が薄れた。細部の検討はまだである。だから、私は、言語とは何かという前人未踏の大きなテーマへの挑戦が、好きなのだと思う。この論文を書いた後、ヨーロッパ人の論理と、日本人の論理の違い、論理のたて方の違いがひどく気になった。日本語は論理に適するの否か。時に話題になることがある。妙に気になった。文法は論理である。とするならば、四

人の文法学者、体系化した文法学を樹立した橋本進吉、時枝誠記、山田孝雄、松下大三郎の論理を知りたくなった。橋本進吉は、ソシュールの言語観に立ったと言われる。そして時枝誠記は、ソシュールに激しく抵抗した。私は、助詞の意味論から文法学の道を長く生きてきたので、優れた助詞論を展開し、陳述論を展開した山田孝雄の文法の論理に真向うことは必然だった。

山田の論述に添いつつ理解していく方法を取ると、私には納得出来ない点がどうしても出て来た。その通りに私は述べた。私にとっては論理の矛盾と受け取れることを、どこかで山田の論理が私の疑問を消すのか。あるいは放置するのか。いつさい、まだ予測不可能である。ただ、細部の矛盾に捕われて、山田の文法学全体を大きく捕えることを見失ってならないと思う。

人文科学の学問が近代化していく中で、山田孝雄は、日本語のすべての文法組織を、実に細部の細部まで刻明に、明らかにして、山田の論理の中で系統化しようと企てたのではないか。その結果が、この膨大な頁数の著書になった。私は、二重否定表現の多用に苦しみながら、読了するのに三年かかった。ただ、山田の文法学が、時枝よりも批判を浴びてはいないのではないかと、そう思うのであるが、それは誰ひとり手をつけることのなかった、すべての文法組織に踏み込み、分類し、名称をつけたその凄さに、よるのではないか。

逆に言えば、そこに山田の論理の弱点があるのではと、私には思える。

一一四八頁の一割を越えた所で、枚数の終りに近づいてきた。第十章の用語概説の論理をたどりつつ、未完のままでペンを置く。最後の頁まで終るのには、これから数年かかるかも知れない。あんなに止めてしまったかったのに、今は挑戦することに心に決めた。

用語概説の冒頭、ここから始まる。

用言とは陳述の力の寓せられてある語にして多くの場合に事物の属性を同時にあらわせり。用言は体言と相待ちて句の組立の骨子となるものにして、体言に対して何等かの説明をして陳述をなす要素なり。用言の定義を簡易にいへば、

事物の説明をなすに用いる単語なり。ということを得べし。この説明をなすことはこれ人間の思想の統一作用をあらわすことを主とし、又それと同時に事物の属性観念をあらわしてあることをも含めるなり。

これに続いて、西洋の文法の動詞と日本語の動詞の違いを述べた。西

洋の文法の *verb* は説明陳述する力を有してあることがその本質であるのに比して、わが国語にては形容詞も陳述の力を有するので、西洋の文法の用言に、我が国語の動詞、形容詞が当たると言う。また用言は活用するものということも、我が国語では当るが、独逸語などでは名詞代名詞等にも語尾の変化が多い。活用ある語即ち用言なりと言うべきではないと言う。用言には陳述と同時に事物の属性をあらわすものが多いということについて、属性は如何なるものかについて、

白し、黒し	事物の色合をあらわせる
長し 短し	物の分量をあらわせる
よし 悪し	事物の性質をあらわせる
読む 養ふ	生物の動作をあらわせる
鳴る 流る	事物の作用を説明する
まさる 死ぬ	事物の状態をあらわせる

かくの如く種々の属性をあらわせるものであると言う。なお、属性をあらわすのは他の品詞にもあるとして、あお、あおやか、あおしを並べて、すべてに属性は共有されているが、中でも副詞が、属性の本質的の語だとして次のように言う。「はるか」という副詞は、

属性そのものを真に属性的の依存観念としてあらわしたるものなるが故に、属性としての本質的の語は寧ろ副詞なりといわざるべからず

属性的の依存観念としてあらわしたるものという意味が、分りにくい。さらに続けた。

ここに於いて考うるに、用言の本質と認むべきものは属性にあらずして陳述の作用を有するという点にありといわざるべからず。かゝる理由によりて、「あり」「なし」の如くに殆ど属性の考えられぬ用言も存するなり。

山田の言う属性をもう少し踏み込んでみると、事物の色合、物の分量、事物の性質、生物の動作、事物の作用、事物の状態と細分し、それぞれを挙げていた。さらに、念のためにとって、あお、あかさ、あまみ は名詞で、あをやか、あからか、あまそう は副詞で、あをし、あかし、あまし は用言であると言う。

私なりに読み取ると、青、赤、甘の属性が共有されているということになる。属性というのは、三語の持つ意味、山田の言う意義と捕えていいのではないか。アオ、アカ、アマが音声である。



ただ、名詞と副詞と形容詞のそれぞれの機能は違う。山田は、副詞がもつとも属性として本質的だと言う。ただし、私の文法感覚で言うところ、あをやか、あからか、あまそうの三語のうち、あをやか、あからか、なぜ副詞なのか。あをやかなり、あおやかだ、あからかなり、あからかだという表現で、形容動詞説と、体言＋断定の助動詞説とがある。だから、あをやか、あからかが副詞であると言われても、少し困る。あをやかに、あからかと連用形が副詞の働きを考えると考えた方が私には自然である。言語が持つ固有の意味と、属性とのつながりは、山田の論理の中で矛盾はないのか。名詞の分類の所で、意義を拒否したと矛盾はないのか。言語から意味を排除して、無色の文法論は成立するのか。

変形した体言を副詞と定めた山田は、もつとも属性の強いものとして副詞をあげ、続けて言う。

されば属性をあらはすことは用言の本質にあらざるものといはざるべからず。こゝに於いて考ふるに用言の本質と認むべきものは属性にあらずして、陳述の作用を有すといふ点にありといはざるべからず。かゝる理由によりて、「あり」「なし」の如くに殆ど属性の考えられぬ用言も存するなり。

ここから、山田の文法学説で名高い陳述論が展開されていく。私は、誠実に読み進めながら、私もまた、何十年も、一筋に陳述とは何かを考えつつ、学問の寂しき道を生きてきたので、素直な疑問を記しながら、山田の論理を究めたい。

私の思考の根底には、助詞の意味を追求してきた土壌がある。時枝理論にひかれたのも、時枝の文法学が言語の意味に執着したものであることと無縁ではない。ソシュール、橋本の言語観は、言語の音声重視に立脚するものと相對する。

ただし、ソシュールの言語本質観の中心にある、言語、ラングの樹立は、何人も拒否出来ない強さを持つ。橋本の文法学は、ソシュールの理論を、どんなふう日本語の文法理論に取り入れたのか。いつの日にか考えたい。

山田の論理に戻ると、山田は意義を考えることは文法学には不要だと明言した。山田の文法学上という、あるいは、文法的にと言うその文法至上主義は、何をあらわそうとしているのか。他の誰よりも、多くを語り尽している山田の論理は、この後どんな風に展開していくのだろうか。ようやく、私は、心がわくわくしてきた。多分、山田の論理の秘密を解き明かす鍵は、言語の意義を本当に、山田は果して切り

捨てることが出来たのかという、そこに焦点を合わせれば、いいのではないかと思うのである。

私には意義なき言語は、考えられない。山田が属性として分類した、事物の色合をあらわす白い、黒い。物の分量をあらわす長い、短い。事物の性質をあらわすよし、悪し。生物の動作をあらわす読む、養う。事物の作用をあらわす鳴る、流る。事物の状態をあらわすまさる、死ぬ。

この分類の規準は、まちがいに一語ずつの言語の意味ではないか。文法上、意義を拒否した山田は、個々のすべての日本語を、文法という枠の中で体系化しようと試みた時、いったんは拒否した言語の持つ、怖るべき力、ソシユールの確立した言語、ラングの力の前に、つまづいたと言っては間違いか。

見事な理論を樹立した時枝も、言語、ラングによって言葉は通じると断言した、ソシユールの真理を、まったく無視した形で、ソシユールの見落した、言語は個人の、固有のものだという面を、情感をぶつけてソシユールの理論の弱点を突破して作り上げたものだった。そのことに、まったく気付かないまま押し通したことが凄いと思う。もしも、気付いたら、反省していたら、あの魅力ある時枝理論は生まれな

かったに違いない。

もしかしたら、山田も自らの信念で、ひたすらに論を進めていくように思える。端々の矛盾に足踏みしたら、日本語のすべての現象を、山田の論理の中で体系化していくことは不可能だったに違いない。

近代的な学問が生まれ始めた頃に生きた山田、橋本、時枝、松下の四大文法学者。今のうちに、あらゆる細かい学問成果などなかった時代、自らの学問を自信を持って世に問うことの出来た時代。四人の優れた文法学者は、批判もされず、無視もされず、ゆつくりと時間をかけて自らの学問が熟成されることを許された時代。だからこそスケールの大きい学者が生まれたのであろうか。

私には、山田の矛盾が気になる。なぜ、どうして

「あり」「なし」の如くに殆ど属性を考へられぬ用言も存するなり。

と断言したのか。あり、あるは存在を、なし、ないは、非存在をあらわす重要な意味を持つ。言語、ラングである。ソシユールのラングを無視して、山田はどんな陳述論を展開していくのか。

平成十九年八月十日 未完

## Abstract of Essay

Review of *Outline of Japanese Grammar* by Yoshio Yamada - Studying the theory of Yamada

Several years ago, I wrote an essay comparing the linguistic theories of Motoki Tokieda and Ferdinand de Saussure, and found significant differences between the two. While the theory of Saussure is very rigid, Motoki Tokieda pursues the theory through feelings.

This time, I analyze the theory of Yamada. However, Yamada's book is so extensive that I could only manage to read one fifth of the book. I tried to find the essence of Yamada's theory of grammar and uncover controversial points.

I intend to read and analyze the text in its entirety, although it may take several years.